

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 8 月 29 日現在

機関番号：31403

研究種目：基礎研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22592594

研究課題名（和文） 自死遺族のグリーフワークを促進する民間信仰の実態とサポートシステムの構築

研究課題名（英文） Folk beliefs that promote grief work among suicide survivors and the building of a support system

研究代表者

藤井 博英 (FUJII HIROHIDE)

日本赤十字秋田看護大学・看護学部・教授

研究者番号：60315538

研究成果の概要（和文）：我々は、民間信仰の「イタコ」を利用した自死遺族のグリーフワークを促進する要素を明確にすることを研究目的とした。「イタコ」を利用した対象者群と、利用しなかった対象者群の半構造化面接の結果を質的に分析し、それぞれに6つの因子が導出された。「イタコ」を利用した遺族は全てソーシャルサポートを受けておらず、「イタコ」を利用し、語ることによる心の浄化と、故人との内的な対話を通じた相互理解や赦しの獲得がグリーフワークの促進要素として見いだされた。

研究成果の概要（英文）：We examined how the support of itako can be helpful in overcoming grief by comparing the recovery process of survivors. Semi-structured interviews were conducted with the survivors who visited itakos and the survivors who did not. Similar codes were grouped into subcategories and Six key themes were generated by each. All the survivors who consulted itakos never relied on any kind of social support. Our investigation revealed the fact that the itako's spiritual support helps suicide survivors. The survivors who visited itakos experience catharsis, mutual understanding and forgiveness with the loved ones, etc., and it helps promoting their grief work.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：自死遺族、グリーフワーク、民間信仰、イタコ、サポートシステム、カミサマ

1. 研究開始当初の背景

思いがけない人生の危機に直面した時、人は、自己存在の根本的な意味や価値にかかわる“魂の叫び”、すなわち spiritual pain を発する。これから立ち直るために、人は自分

の外にある絶対的な存在や、人間的限界や有限性を持たない世界に新たな“生きる意欲”を求める。また自分にとってもっとも重要なものは何かという視点から、“人生の意味”や“目的”をつかもうとする spirituality の

醸成を図ろうとする。この spirituality の向上と良好な状態の強化のためには「癒しの空間」が必要となる。

自殺により大切な人を亡くした遺族（以下、自死遺族とする）の苦しみは、喪失体験にとどまらず、スティグマや孤立といった社会の偏見といった苦しみも与えられている。自死遺族は、故人に対する葛藤を抱きながら、語れない状況で社会的な孤立が生じ、病的悲嘆に陥り、不安障害、うつ病、心的外傷後ストレス障害などを発病している場合もある。最悪の場合は、遺された人々の中に連鎖的に自殺が生じてしまうこともある。このような自死遺族は、親しい関係を突然断ち切られた喪失感を埋めたいと希求している。自死遺族の中には、「イタコ」を介してあの世の故人と交流することで、現世の苦痛 spiritual pain から解放され、突然断ち切られた関係の喪失感を埋めて spirituality の醸成を図っている人達がいる。「口寄せ」は、自死遺族のサポートに寄与し、複雑性悲嘆（死の受け入れがたさ・その人のいない人生や生活に意味を見いだせず空虚感、絶望感・QOLの低下）からの脱却を図ることが可能と考えられる。

江戸時代のころから日本では、イタコは遺された家族の傷ついた心に、「癒やしの空間」を提供する機能を有している。亡くなってしまった大切な家族、親族、友人らの言づてとして、イタコらは、口寄せの儀式の中で遺された家族たちの喪失感を解決していた。現代医学でいえば、家族の喪の仕事はイタコが口寄せで行っているということになる。

科学は、肉体の死とともに靈魂もなくなることを厳然とした学問として確立している。しかし、現実人間社会では、死んだ人の靈魂を信じ、その靈魂と語りたがっているという（津川, 1998）。これら死者とのコミュニケーションの仲介となる「口寄せ」が「イタコ」の重要な職分となっている。特に「イタコ」の「口寄せ」は、民間信仰として世間の信仰が篤い。口寄せとは、イタコが仏の代わりとなって言葉を降ろすことである。イタコは、仏と話したい、声を聞きたい、あの世の様子を聞きたい人のために、霊を降ろす。一方、死者も残した思いをイタコを通じて伝えたいと考えられており、生者と死者、双方からイタコは求められている。

青森県の恐山は、比叡山、高野山と並ぶ3大霊場の一つといわれ、下北半島や津軽地方に、身体に神仏が憑依し、予言や占い、治療行為などを行う「イタコ」という名称のシャーマンが現在も存在している。民間信仰「イタコ」は、死者の口寄せを通して、相談にのることによってカタルシスを図り、「癒しの空間」や「救い」を与えているのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、自死遺族のグリーフワークにおいて、青森県の特徴的な民間信仰である「イタコ」の、どのような支えが喪失による悲嘆を乗り越えることができたかを明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン：記述帰納型研究（因子探索研究）

(2) 研究対象者の選定条件

（イタコを利用した方およびイタコを利用しない方）の自死遺族（以下、対象者とする）で1年以上経過し、自分のことが語れる状況になった方で、公募等により語することに同意を得られた20歳以上の自死遺族とした。尚、選定条件として1年以上とした根拠は、岡堂ら（1997）は、「この心理過程は1年から1年以上続くのが常である」としていることや、A・デーケン（1986）が「基本的な悲嘆プロセスをたどって立ち直りの段階に到達するまでに、多くの人は1年かかる」と述べていること、また、自死遺族を対象とした先行研究（渡邊, 2006）でも1年以上としていることから同様に設定した。

(3) 研究対象者への依頼方法

同意が得られた家族に、口頭および文書で協力依頼ならびに本研究の目的・方法・内容・対象者の選定条件を明記した研究計画書および倫理に関する説明を行った。対象となる遺族が十分に理解と納得を受けて上で、本研究への諾否を確認した。研究への承認を得られた対象者には、後日あらためて連絡を取り、インタビュー実施の日時と場所を決定した。調査場所についてはプライバシーの確保、対象者が語りやすい雰囲気的空間とし、あらかじめ調査場所を数箇所設定し、対象者に希望する場所を選定してもらった。調査当日のインタビュー開始前に、再度、研究の趣旨と倫理について口頭と書面で説明を行い、研究への諾否の再確認後、研究同意書に署名していただき研究を開始した。

(4) データ収集の方法

対象者（イタコを利用した方およびイタコを利用しない方）の基礎情報（年齢・性別・死別者との関係・死別時期・職業）の把握を行い、対象者である自死遺族の本質的な経験について、インタビューによってデータを得ることとした。

1) インタビュー方法の実際

①インタビューは個人的な経験について詳細に尋ねることになるため、インタビュー場所は対象者の意向に添い、公共施設のカウンセリング室や会議室、自宅への訪問により、経験を自由に語ることでプライバシーが保護できる環境を確保した。

②インタビューは作成したインタビューガイドを基に約60分程度の半構造化インタビューを実施した。インタビュー内容は、対象者の承諾を得てICレコーダに録音させてもらった。基礎情報については、対象者の同意を得て記録した。研究者は傾聴する形を取る事によって、対象者にかかる心理的負担をできるだけ少なくするように心がけた。

2) インタビュー内容

①家族が亡くなられた後自分の気持ちが立ち直るまでの生活について(支えになったこと、辛かったことはどんなとか等)

②心身ともに自分でもう大丈夫かな(通常の生活に戻れたかな)と自覚できたのはいつ頃か。どのくらいの期間かかったか。

③通常の生活に戻ることが出来たのは、「イタコ」やその他どのような支援が(事が)あったからだと思うか。

④「イタコ」が心の支えとなったか。

⑤どのような言葉かけが一番良かったか。

⑥「イタコ」「カミサマ」に何回行ったのか

⑦なぜ、「イタコ」「カミサマ」に行ったのか(行った理由について)

⑧振り返ると、「イタコ」「カミサマ」をどう思うか

⑨自死した本人をどう思っているか(思っていたか)

⑩自死した本人と家族の関係性について

4. 研究成果

「イタコ」を利用した群の対象者7名は、全員が女性で平均年齢50歳代であった。「イタコ」を利用しなかった群の対象者は5名で、うち3名が女性、2名が男性で平均年齢は50歳代であった。

イタコを利用した群のコードは42、サブカテゴリーは18、テーマは6、イタコを利用しなかった群のコードは75、サブカテゴリーは13、テーマは6導出された。

グリーフワークを促進する因子としてのテーマは、それぞれ以下の通りであった。

イタコを利用しなかった群では、【役割と責任】【心の解放・依拠】【ソーシャルサポート】【家族の再生】【呪縛からの解放】【経験の社会化】が導出された。

イタコを利用した群では、【心の浄化】【故人の生き様への共感】【故人による加護の実感】【故人との繋がりの実感】【相互の赦免の

獲得】【生きることへの託宣の獲得】が導出された。

両者のグリーフワークを促進する因子の相違は、ソーシャルサポートの有無であった。「イタコ」を利用しなかった遺族は、遺族会を利用しており、自己の経験を遺族会に活用していた。「イタコ」を利用した遺族は全てそれまでソーシャルサポートを受けておらず、信頼を寄せ他者に語ることでできていなかった。

「イタコ」が死者の霊を呼び出し現世の人間に語りかけることは、近代科学の常識ではあり得ない。その真偽をここで問うものではない。しかし「イタコ」を利用した精神的危機の中にある遺族は、超越的他者の口寄せにより自死者との再会や繋がりを希求し、その交流によって様々な力を獲得してグリーフワークを促進していたことが明らかになった。このような、シャーマンを利用し、癒やされている存在を認めると共に、安心して語ることで心の浄化と、故人との内的な対話を通じた相互理解や赦しの獲得が遺族のグリーフワークを促進する要因として見いだされた。

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計1件)

発表者：藤井 博英

発表タイトル：民間信仰である「イタコ」を訪れる自死遺族の動機

学会名：第32回日本看護科学学会学術集会

発表年月日：平成24年11月30日

発表場所：日本(東京)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤井 博英 (FUJII HIROHIDE)

日本赤十字秋田看護大学・看護学部・教授
研究者番号：60315538

(2) 研究分担者

宇佐美 覚 (USAMI SATORU)

日本赤十字秋田看護大学・看護学部・講師
研究者番号：20289763

牟田 能子 (MUTA YOSHIKO)

日本赤十字秋田看護大学看護学部 助教
研究者番号：30465801

入江 良平 (IRIE RYOUHEI)

青森県立保健大学・健康科学部社会福祉
学科・教授

研究者番号：60193702

大和田 猛 (OOWADA TAKESHI)
青森県立保健大学・健康科学部社会福祉
学科・教授
研究者番号：90194323

(3)連携研究者
なし